

## 詩歌・小説の中のはきもの (第15回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

146 今日も、スニーカーを履いた足を軽くあげてみせる。

「靴も、学生時代に戻ったってわけだ」

弥生も真由美も、がっちりしたローヒールを履いている。

「そ、なんてったってらくが一番ね。でもね、時々、こわくなるんだなあ」

宏美が続ける。

「こんな風に、らくばかり求めるっていうことは、外から見たら、緊張感を失くしてるってことにならないかな」

「と、いうのとも違うと思う。ただただ怠情にらくを求めているというより、自分にとって不要なものを、少しずつ少しずつ殺ぎ落としていったら、ここに辿り着きましたって感じだから」

落合恵子

★『スニーカーズ』から。靴に求めるものは、年齢によっても、体力、趣味、社会的な地位・立場などによっても異なる。靴と人間のかかわりは多種多様で面白い。現代の小説にはこのような人生観が示されているので、油断がならない。実際靴には不要なものがいろいろ搭載されている。

147 黒靴のサイズ22こつこつと

生きし姿を母は残せり

家弓寿美子

★『朝日歌壇』から。少しくたびれた地味な、たった一足の靴に、母の生涯が凝縮されていたのだ。こんな小さな靴を履いて母

は自分たち子供を養ってくれたのである。娘にはその靴が等身大の母親に見えたのだと思う。「白足袋は陽にひるがへる年を経て母の文数をわれは記憶せず 上田三四二」、これに比べれば、サイズ22と確認できるのは、それだけでも幸せな人なのである。

148 old shoeには「古いぼれ」という意味もあり…old bootsは「古いぼれ」ではなく、「はげしく」ということで、He worked like old boots.のように用いられる。

「もう一足の靴」とは「別問題」…「その靴は別の足が履いている」とは「形勢が逆転した」…「ブーツを履いたまま寝る」とは「酔っ払っている」ことを指す。

佐藤喬・市川裕子

★『服装英語雑考』から。「靴の総称はboots and shoesである。foot wearという英語は、靴下やゲートルなどをも含めている語なので、「履物」の総称としてはふさわしくない」という。この他にイギリスとアメリカではbootsといっても「深靴」と「長靴」の差がある。翻訳小説を読んでいて何かおかしいと思って原書に当たるとしばしば、この種の取り違いがある。

149 ガラスの靴がペロロの創作なら、シンデレラはもともとどんな靴を履いていたのかー？グリム版では「金の靴」、バジレ版では「ピアネッラ」と記されている

る。…

では「ピアネッラ」とは何なのか。これはイタリア語で上履き、スリッパのことなのである。

島田荘司

★『飛鳥のガラスの靴』から。ピアネッラはどういう時に用いたか。ぬかるみを歩くときのオーバーシューズである。中世の道路は上下水道の未発達により汚物を道路に捨てていた。よく映画に出てくるシーンがある。2、3階から壺をさかさにして、投げ捨てられた大小便が降ってきて通行人の頭にかかるというものだが、あれは実話。貴族たちが宮殿、舞踏会会場に汚れた靴では入ることが出来ないから、オーバーシューズは必需品ではあったが、それを日常履くのはひどく貧しい人たちだった。

#### 150 一列のスリッパ

どこからはいたらいいのかね

大野風柳

宿の下駄きれいな順にはかれてく

山岸やよい

★『現代川柳選集』、『朝日せんりゅう』から。どちらも私たちが感じたり、行っていることで苦笑を禁じえない。家庭から下駄が消えてしまった現在、旅館の下駄は敢然と孤塁を守っている。それは特筆していいことだろう。いまだにその履き心地に満足している人もいて、「気がつけば旅館の下駄で新幹線 老川繁」という句もあるので書き添えよう。

#### 151 「失われた靴を求めて」

「彼女はアリス・ブルーの靴をはいて」

「夢に見るは薄茶色の靴のジーニー」

「靴のダイヤルMを廻せ」

「履くべきか履かざるべきか」

アンディー・ウォーホル

★『アンディー・ウォーホル展カタログ』

から。アメリカのポップ・アート画家として著名な彼は、1955年から靴会社であるI・ミラー社が毎週日曜日の「ニューヨーク・タイムズ」に掲載した靴の広告を担当した。その広告の靴の絵に添えられたキャッチ・コピーは、古い歌や名言などのパロディであった。ブルーストの「失われた時を求めて」、不思議の国のアリスは青い服を着ていた、ヒッチコックの映画、ハムレットの科白などなど。洲濱元子は解説で言う「上品で落ち着いた色使いと懐古調のデザインがファッショナブルな雰囲気を出している。まさに失われた時代の靴が現代に蘇ったかのようなものである」と。

#### 152 山茶花や死ぬまで買う靴の数

田中いすず

死の重さ春泥の靴ふたつ

下山光子

★『現代俳句のつどい』、『句読点』から。古稀を過ぎて、あと何足の登山靴を履けるのだろうかと考えることがある。既に彼岸に行ってしまった岳友の遺族から、履けるものなら履いて下さいませんかと言われた登山靴は、正に死の重みを持っている。しかし、私は普段履きを前にして死を思ったことはなかった。この二句を読んで、そうか、そんな思いで靴売り場に来る老齢のお客様もあるのだと教えられた。

#### 153 靴の嗜好に関して、ぼくはどちらか

というと古風だ。大胆でさっぱりしたデザインがいい。細々とした細工よりも、全体の雰囲気重んじる。エッジの利いた、スムーズな流線型が好ましい。ごちゃごちゃした飾り、バックルやリボン、ボタン、ビーズ、ラインストーン、スパンコール、造花をいちいち愛でている暇はない。とはいうもののミュールやスリングバック、ストラップのついたサンダル、ファーをあしらった室内履きはいつでも歓迎だ。…べらぼうにヒールの高い靴に

もひれ伏す。

ジェフ・ニコルスン

★『美しい足に踏まれて（雨海弘美訳）』から。靴フェティストだけあって嗜好は詳細をきわめる。プロだったら、自分の好きな靴をスラスラ言えるようでありたい。私たちは、何となく自分の好みを知っているつもりでいても、実は正確に自分の嗜好を把握していない場合が多い。黒と茶、どちらが好き？ サンドルとハイヒール、どちらが好き？ 以下二者択一の30問も答えていくと、自分の好みが鮮明になっていく。これは自分の性格や人生観を捉える心理テストの様式応用である。品選びに迷う顧客に応用できるやり方である。

154 「赤い靴」再演の日、楽屋で出番を待つページを、クラスターはつれ戻そうとする。ページは拒んだ。あきらめて彼女の前から去るクラスター。けれどもその途端、ページの胸が騒ぎ始めるのだ。舞台に背を向け、階段をかけ下りる緊迫したシーンが続く。そしてバルコニーからのり出すや、夫の乗ろうとした列車めがけて跳躍するページ。クラスターが瀕死の彼女の赤い靴を脱がせた途端、ページは息絶えるのだ。幕のあく「赤い靴」一。

一言も交わさず映画を見終え、再びの静かなエンディングにホッとして隣を見やると、母は放心したように椅子にうもれていた。そして、

「働く女は皆、赤い靴をはいてるね」

と、こみあげるものを押さえながら、そう言った。

有吉玉青

★『身がわり』から。母とは有吉佐和子。アンデルセンの「赤い靴」を下敷きにした映画。この赤い靴を履くと名バレリーナになれるが、死ぬまで脱ぐことができない。ヴィッキー・ページは青年作曲家ジュリア

ン・クラスターと恋におち、バレエ団長からバレエか恋かどちらかを選べと言われる。働く女に「赤い靴」を履いていると思わせているうちは、日本の出生率は上がらない。

155 履いてみるとゆるい感じがしたので、そういうと、「いえ、これでいいんです」ときっぱりいいきられた。流行の靴によくある、先がシャープな纏足靴とは違って、全体的に丸っこいので、みた感じはとても大きく見える。私のように背が低いと足元が妙に重くなってしまいが、まあ、それも仕方がないと履いてみたら、まるで腰がマッサージされているようだった。

群ようこ

★『群ようこの良品カタログ』から。群さんはきちんと商品名を挙げているのだが、割愛する。関心のある方は直接本を手にして頂きたい。履き心地の良さを表現するのに「腰がマッサージされている」という感想を初めて聴いた。シューフィッターが、こんな本を書いている個性的な顧客に「これでいい」と言い切った信念にも感心した。

156 日本人の足はなんと小さく形が良いのか、と気がつく、一百姓の日にやけたはだしの足であれ、小さい小さい下駄をはいた子供の可愛い足であれ、真白い足袋をはいた若い娘の足であれ。…日本人の足は古風な均斉をもっている。—西洋人の足の形を崩したあの嫌な靴によってもまだ痛められていないのだ。

ラフカディオ・ハーン

★『知られざる日本の面影』から。日本人の足が形のよいものだと、当の日本人は夢にも思っていなかったときの指摘である。現在、靴の欠点はもう十分に日本人に知れ渡ったのだから、靴は劇的に変化しなくてはならない。